

ざわざわとした雑踏の音に、工事や電車の音が入り交じる。広い室内に流れる都会の喧騒は、騒がしくもどこかリスミカルで気持ち落ち着く。

2020年8月に開業したホテル「シークエンス ミヤシタパーク」(東京渋谷)17階にあるスイートルームの窓際には、この部屋のためだけに作られた真空管アンプが置かれ、ここしか聞けない「渋谷の街の音」がスピーカーから流れる。「眼下に渋谷の街を眺めながら、時間の変化を感じられる空間をめざした」。設計を担当したパドル(同)代表の加藤匠毅さんは、こう話す。ガラス張りの真空管アンプは洗練されたアート作品のような趣だ。ケースには音を増幅させる4本の真空チューブと放熱材となる銅製の針山、それを支えるひび割れた土の塊が納められる。アンプの脇のQRコードをスマートフォンなどで読み取ってアンプにつなげると、スピーカーから音が流れる。音を採取、編集したのはサウンドクリエイターの大河内康晴さんだ。

普段はスピーカーに内蔵されることの多いアンプが目の前に現れることで、繊細な音の粒立ちがよりクリアになった気がする。加藤さんは「情報化社会で生活する我々は、日常の中でふとした『気づき』がしくくなっていると思う。渋谷という街の音を聞きながら、その先に広がる様々な景色を思い浮かべてほしい」と強調する。

20年4月に東京都立川市の商業施設



シークエンス ミヤシタパーク 真空管アンプ。眼下に



ネットサウンドコーヒーは、足元と頭上に高精細のスピーカーを設置し、様々な音を流すことで臨場感ある空間を生み出している(東京都立川市)

グリーンズプリングスにオープンした「グッドサウンドコーヒー」では、高精細な音を生み出すスピーカーを用い、足元からは小川のせせらぎや鳥の声といった自然の音を、頭上からはジャズやボサノバの音楽を響かせる。緩やかな水音は鳥の声と相まって透き通った清流を連想させ、さらに軽快なボサノバが降り注ぐことで、明るい

自然の中で音楽を聴いているような感覚に浸れる。12月上旬、テラス席で友人と談笑していた東京都在住の丹野麻樹さんは、ここを訪れるのは2度目だという。「何気なく耳にしていたが、ふとした瞬間に小川のせせらぎに気づく。広場の眺めと音楽、自然の音が違和感なく耳に入ってきます」と顔をほころばせる。設

計・運営を手がけるカームデザイン(大阪)社長の金沢拓也さんは、「例えば森の中にいると、木々の葉擦れの音は上から、落ち葉を踏む音は下から、それぞれ違うところから聞こえる。そうした複層的な音の重なりを店舗空間の中で表現してみた」と狙いを語る。日常や自然界で起こる何の変哲もない音を「心地よい」と感じる生理的な反



文化放送は温泉のつくる音などコミュニ

応は「ASMR(自律感覚絶頂反応)」と呼ばれ、近年、関心が高まっている。動画投稿サイトでも「そしゃく音」や「雨の音」といった様々な音を録音、編集したものがASMRというタイトルで投稿され、多くの視聴者を集める。音を聴くことで追体験ができたり、疲れが和らざりリラックスできたりするという。

ASMRの人気を受け、文化放送は19年に「たき火の音」を90分間放送するラジオ番組を制作した。ラジオといえど、たき火の音だけを放送し続けるのは異例で、SNS(交流サイト)上で話題を呼んだ。パチパチと火の粉が飛び、乾いた音とともに薪が割れ落ちる。途中で薪をくべたとわかる音が聞こえるなど動きもあり、長時間でも聞き飽きない工夫が施されている。

初回の成功以降、20年からはチキーンと炒める音、ハイボールをつくる音など一風変わった番組を提供してきた。3Dオーディオ技術を使って擬真し、ヘッドホンを通せば音が移動するような立体感や強弱の変化まで味わえる。プロデューサーを務める加藤慶成部長は「日常の音というのは、昨今の装飾されすぎた動画コンテンツとは違い、シンプルでリアルに近い。そこにASMRが多くの人に受け入れられる理由があるのではないかと考える。スマートフォンやスピーカーやワイヤレスイヤホンなどが普及し、音を響かせる環境が整ってきていること、ASMRの